

# Artificial S 2 - Daemon - 麥生田兵吾 Mugyuda Hyogo

2014年5月6日(火)―18日(日) 11:00～19:00

月曜日休廊 / 金曜日20:00まで / 最終日18:00まで

Gallery PARC

GRAND MARBLE

KG+  
KYOTO  
GRAPHIE  
MUSEUM

協力：奥村元洋 オクムラモトヒロ、スタジオフロウ

## 展覧会について | About

本展は今年で2回目の開催となる国際写真フェスティバル「KYOTOGRAPHIE」のサテライト展である「KG+（ケージープラス）」への参加展覧会です。また、Gallery PARCではこの開催期間にあわせ、「夏池風刃展」(4/8～4/20)、「大洲大作展」(4/22～5/4)、「麥生田兵吾展」(5/6～5/18)の3つの写真展を連続開催。本展はその第三弾となる展覧会です。

麥生田兵吾(むぎゅうだ・ひょうご/1976年・大阪生まれ)は写真に取り組むにあたり、その主題として「Artificial S」を挙げています。「SはSense＝感覚(感性)」という意味を持つことから、「Artificial S」を「人間の手によりつくられた感性」というような意味として捉えられます。

麥生田はこの「Artificial S」を補完・構成する一つの試みとして2010年の1月より、毎日撮影した写真を、撮影したその日のうちに自身のウェブサイト内「pile of photographys」にアップする試みを4年以上(現在も継続中)に渡って絶え間なく続けています。

この麥生田の取り組みには「進まねば失い、怠れば後退する、そういった性質の感性ともいえるものを手に入れたい」として「私はこれを、例えば表現においても、先んずるものにしたいと考えています」とする意志に基づくものであり、「人間(＝麥生田)の手によりつくられた感性」の存在を確認するための行為とも呼べるものです。そして、ここでは「写真」はその照査(証左)として存在しているといえます。

麥生田はこの「Artificial S」を現在のところ5つに別けており、本展覧会はその2つ目に位置づけられている“Daemon”(ギリシャ神話におけるダイモン＝神々と人間の間に介在する二次的な神)をテーマとして、「人の心におさまっている正体を定めないイメージを露にする」ものです。

展示されるそれぞれの「写真」は、いずれも我々が日常で目にする風景の一部がただ「写った」ものであり、それ自体はおよそ「意味」を持つものではありません。しかし、目の前のイメージ(図像)が鑑賞者に内在する茫漠としたイメージ(想像)を借りて、ひとつのイメージ(想像や図像や意味)を成すこと。いわば偶像崇拜にも似たこのベクトルが、鑑賞者の目に前にある「世界がただ写ったもの」によって引き起こされる時、私たちは確かにソレ(写真あるいは世界)に出会い、ソコ(写真あるいは世界)に何かを見つけます。ここで起こる事はただソレだけのことです。20点あまりの写真がただ在る本展で、皆さんは何を見つけるでしょう。

## 麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo

主題「Artificial S」。

「S」は「感覚,感性=sense」という意味を持っています。ですから「Artificial S」は、「人間の手により作られた感性」というような意味です。この主題は5つの章に分けられています。今展覧会はその2章目の“Daemon”。人の心におさまっている正体を定めないイメージ=daemonをみつけます。

たとえば、心をピタッと変わらないままで伝えようとすれば、向うへ届くまでの間でポロポロとたくさんのもが嘘のほうへ落ちていきます。嬉しい事を“嬉しい”と、悲しい事を“悲しい”と、かっちり決まった言葉を使っても、大きい小さいはあるものの喪失感を覚えます。りんごを“りんご”と届けても同じようです。

写真も同じようなことが起こります。対象が光学的なものでなければ写真にはできませんが、“このりんご”と“写ったりんご(写真)”は異なり、“見られて了解されたりんご”もまた異なります。そして写真はりんごの姿の痕跡として大変強い確かさを与えますから、それぞれ在るはずの差異をみえにくくしています。

言葉も写真も嘘をつきます。ですがこれも嘘です。事物には嘘も本当もなく、ただ在るだけなのだから。意味などきつとないのです。私はある精神的にまいった時期がありました。いよいよ心が酷くなった頃に見ていた景色は“意味”がありませんでした。りんごはただりんごで、コップはただコップで、りんごとコップに何も違いはなく、その違いのなさにも違いはなかったのです。文字通りの意味のない世界です。

そのような世界で写真は必要はありません。もちろん在ってよいですが写真を発見することはできないでしょう。ですからわざわざカメラを持ち出しシャッターを押す必要などあるわけがありません。完成した世界、静止した世界でした。ただそれを決定しなかったものは命です。私の小さくなった心臓が、静止した世界で動いていました。私は私の生で一番最後となる覚悟をしなければいけませんでした。

私は命を信じます。命は静止する事から抵抗し、世界を見ます。見ることで意味を生みだすのです。見つけるのです。

この世界は不可能で覆われてる真っ暗闇です。しかし命は、手探りする事だって恐ろしい闇をビリビリ切り開いて進んでゆきます。この力は想像力です。スプーンを持ち上げる事だって、階段を降りる一歩だって、歌うこと、踊ること、これらは全て想像力によるものです。想像力こそが不可能を「ソナ事ハナイ」と否定し続けられるのもです。(こういう理由から、シャッターを押すという所作からすでに意味を感じていますので、私は写真家と名乗らずにいられません。)

嘘や本当という話に戻りますと、実はそんなことはどうでもよいのです。ただ、そのどうでもよいことから学ばないといけない事は、言葉がただ言葉であり、写真はただ写真であるということです。私と他者との間にある点「・」、それが言葉や写真です。その「・」は正しかったり正しくなかったりしませんし、だから良いも悪いもありません。ただ、お盆にのったものをドンガラガッシャとやってしまうような行儀の悪い「・」であればよいと思っています。

本展覧会の「・」は「daemon」です。みなさんは何を見つけてくれるでしょう。

## 質疑応答: Questions and Answers

展覧会について

実際の写真を目の前に、その映像を過去のものとしてみるだけでなく、この場にある“今”として経験(再生)できるようになりました。映像=イメージでなく、映像とは異なっているはずの、鑑賞者自身が持っているイメージをみつけてもらえたらと思っています。

そもそも「写真」に取り組むきっかけとは？  
そばに見る写真家のかたがたの写真がわからなかったからです。では、どのようなものか、とはじめました。

写真とはどのようなものだと思うか？  
ひとつ以上の記憶を持つものが、欲望し、撮り、現像したそれが、誰かに発見されて現れてくるもの。人の都合によって無数にその存在のありかたを変えます。

写真を「とる」ことについて  
知らないものを知りたいです。ですが知らないものを見る事は大変難しいです。ですから見えているものを案内に見えないものを探します。そして見えないままも、カメラへ撮影を指示するアクションを出します。それが私のとつての、写真を構成するうちのひとつ“撮る”ということです。

あなたにとって「作品」とは何を指すか？  
いつか(から)のどこか(から)の、人と人之间にあって、消えてしまわないで、人の前にあっては、常に“今”として生きるもの、生まれるもの。

2002年から取り組んでいる「Artificial S」は現在5つに大別されているそうですが、その全体像は？  
全体像は“生死”。章に分かれています。生→死という過程(シーズン)ではなく、生=死ということでもありません。どこかにのっている命の姿、転がる姿をさせられたらと思っています。

あなたにとって「世界」とは？  
「Artificial S」と、タイトルを引合いにだせば、人の都合によって無数に存在するもの。「私にとっての世界」と考えてみても、「世界」をうまく説明することはできません。わかりません、すみません。でも、「世界」をそれぞれの人がもっている白い紙(単数か複数か)だとすると、複数の人の白い紙を繋ぎ合わせて大きなものになった世界もあって、それらは共有され個人のものとも重なって、よけいにわからないものになるようです。

「Artificial S」に取り組む中で自覚する変化はありますか？  
あります。たとえば一度構造化したものが素材から破壊されたり、また構造が代謝するように素材を変容させたりする事を知り、変容に柔軟になりました。

行ってみたい場所は？  
宇宙(帰ってこれるなら)

今後の希望は？  
「Artificial S」を完成させたい

何が美しいか  
今を感じること

何が醜いか  
思い込み

何がかっこいいか  
結果が出てないのに自信満々(それは短所でもあります)

何がかっこわるいか  
ばれる嘘(それは長所でもあります)

何が気持ちいいか  
毛布のはじっこ

何が気持ち悪いか  
昨日きたシャツ

何を望んでいるか  
それは言えません

何を恐れているか  
忘れ物

何を見たいか  
すでに欲望された以外のもの

何をしたいか  
写真です

## 略歴

麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo  
http://hyogom.com

1976 生まれる  
2010 THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010(3331千代田ARTS, 秋葉原):「Zine port」の一員としてZineを出品  
2011 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS, 秋葉原):「Zine port」の一員としてZineを出品  
- グループ展 「in the waitingroom」(waitingroom, 恵比寿)  
2013 グループ展 「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフールド / Gallery PARC)

2010年1月～現在:写真作品「pile of photographys」をweb上で更新中

## 展示作品 | Works

pic.1 緑色の髪の女  
2013  
pic.2 妊婦  
2002  
pic.3 雪  
2001  
pic.4 犬  
2001  
pic.5 柱  
2001  
pic.6 土星  
2003  
pic.7 ガーベラ  
2003  
pic.8 座る男  
2003  
pic.9 女、男  
2003  
pic.10 無題 #1,#2,#3 (畳に置いた作品、手前から)  
2004  
pic.11 雪(daemon) #1,#2,#3 (手前から)  
2004  
pic.12 森(daemon)  
2002  
pic.13 風景  
2005  
pic.14 ステッチ  
2004

